昭和25年2月10日第3種郵便物認可　令和8年6月1日発行（毎月1回1日発行）　第109巻第6号　ISSN 1341-6669

福祉の総合専門誌

月刊福祉

Monthly Welfare

6
June
2026

■特集　教育と福祉で子どもを育む

社会福祉法人 全国社会福祉協議会

レポートⅣ

保育園で中学生の不登校支援を
―取り組みを通しての気づきから広がる支援

社会福祉法人明照保育園 理事長　中島 章裕

中学生の保育体験を通して

本園では約35年前より、近隣中学校の3年生全員を対象に、家庭科の授業の一環として保育体験を実施している。もともとは職場体験として一部の生徒を受け入れていたが、その関わりのなかで見せる姿に可能性を感じ、すべての生徒に同様の体験の機会を提供できないかと考えたことがきっかけである。当時の校長先生や教務の先生も前向きに考えてくれ、3年生全員による保育体験が始まった。

当初は、やんちゃな生徒もいて、学校側にも不安があったが、園児との関わりを通して、学校では見せない表情を見せるようになった。「学校ではいつも不機嫌なのに」と話す先生に対し、「この姿こそが本来の姿なのではないか」と応えたこともあった。初めは、消極的であったり不満そうに見えたりした生徒も、園児との関わりのなかで笑顔を取り戻していく。その変化に最も驚いたのは学校の先生であった。

少子化の進行により異年齢交流の機会が減少するなかで、中学生と園児との相性のよさが確認され、学校と園の双方にとって有意義な取り組みとして継続されてきた。

しかし一方で、課題を抱える生徒の参加が徐々に減少していった。「この頃は、授業が落ち着いてできてはいますが、名簿上の欠席者が増えています」と顔なじみの先生が言っていた。その背景には不登校の増加があった。かつて学校で問題行動ありとされていた生徒が、やがて学校に来られなくなっていたのである。

写真1　中学校3年生と園児の交流

卒園児が不登校に

保育体験は職員にとって卒園児と再会できる機会でもあり、大きな喜びであった。成長した姿に感動すると同時に、欠席者がいる場合にはその後の様子が気がかりとなる。ある年、保育園時代にかなり気にかけた子が中学校3年生になった。「今年は○○くん、来るよね?」とみんなで楽しみにしていたその子は欠席だった。先生に聞くと、「もうずいぶん学校にも来ていないんですよ」と教えてくれた。

こうした状況のなか、2003（平成15）年に園内に児童クラブを増設し、あわせてフリースクール的な機能をもつ場を開設した。公的制度に基づくものではないため、補助金や授業料もない。今までのように保護者の相談に応じ、学校に行きづらい子どもが園児との関わりを通して自信を回復することを目的とした取り組みである。そんな子どもがいたら、「大丈夫だよ!」とそっと背中を押してあげたい。「ひとりじゃないんだよ、君には、よいところがたくさんあるんだよ」と気づいてほしい。同年代の集団になじめない子どもであっても、園児にとっては頼れる存在となる。園児たちや先生から「ありがとう!」と言われることが何よりの薬のようだ。関わりのなかで感謝される経験が自己肯定感の回復につながる。子どもにとって重要なのは、「自分は誰かの役に立っている」という実感なのだとつくづく思う。

当時、不登校支援として公的な適応指導教室も設置されていたが、保育園との連携は容易ではなかった。この経験は、組織間連携の難しさと重要性を強く認識させるものであった。

組織を超えた交流をめざした「勝手に公開保育」

本園では従来から公開保育を実施していたが、参加者は主に保育関係者に限られていた。そこで2015年度より、組織の枠を超えた交流を目的とした「公開保育」を開始した。ほかの組織に頼らないで、本園独自で行ってきたので、私たちは、「勝手に公開保育」

と呼んでいる。

当初は学校関係者の参加は少なかったが、継続的なはたらきかけにより、現在では保育・教育関係者に加え、臨床心理士、スクールカウンセラー、行政関係者など多様な専門職が参加する場へと発展している。参加者に共通するのは、子どもたちの健やかな成長を願う思いである。いうなれば「チーム子育て」。組織の枠を超えた緩やかな連携の場として機能しており、地域における支援ネットワーク形成の一端を担っている。以前、相手にもしてもらえなかった適応指導教室（現・教育支援センター）との交流も、この公開保育を通して一年に数回だができるようになった。

コロナ禍による断絶と再構築

コロナ禍により、中学生の保育体験をはじめとする交流は一時的に途絶えてしまった。人的異動も重なり、取り組みの意義が継承されにくい状況となった。しかし現在は、保育体験も再開し、教育支援センターとの交流も以前よりも多く、月1回の頻度で行われるなど、連携は再び広がりを見せている。昨年度の公開保育では、教育長をはじめ、多くの小中高校の先生方も参加してくれた。継続の重要性と同時に、関係性を維持する仕組みの必要性が明らかとなった。

ボードゲームを通じた新たな交流

3年ほど前より、「勝手に公開保育」で出会った臨床心理士や教育支援センター・特別支援学校の先生、不登校生の親子が月1回、夜の保育園に集い、「明（めい）（笑（しょう））ボードゲーム会」と称してボードゲームを楽しんでいる。療育のなかでも取り入れられるようになってきたボードゲーム。大人も子どもも地位や立場に関係なく、ただ純粋にボードゲームを楽しむ場となっている。不登校生の親子も初めは子どもだけの参加でお母さんは見ていただけだったが、「ボードゲームの前では誰でも平等！」という合言葉のもと、今では親子も先生も関係なく、ひとりの人間として対峙（たいじ）している。そんな人間関係のなかで互いが学び合うことも多いと感じている。このような場では、安心感のある

写真2　教育支援センターに通う子どもの保育室での様子

関係性が育まれ、相互理解が深まる。形式的な支援とは異なる、新たな関係構築の可能性を示している。

保育園やフリースクールは子どもにとって大切な社会のひとつ

不登校は特別なことではなく、多くの子どもに共通する課題の延長線上にあると感じている。背景には、異年齢交流の減少と人間関係の狭小化がある。定年退職した小学校の先生が「新任の頃も今も、子どもたちの姿は変わっていないが、子どもたちの輪がどんどん小さくなっている。ひと昔前なら仲の悪い子がいてもクラスみんなで大縄跳びや鬼ごっこをやって遊んでいたが、この頃ではほとんど見なくなった」と言っていた。その結果、価値観や考えかたよった子が増えているということだった。ただ、これは子どもたちだけの話ではなく、保護者の姿にもつながっている。かつて地域には、年齢の異なる子ども同士が関わり合う「子どもの群れ」があった。そのなかで子どもは、他者との距離のとり方や関係の築き方を自然に学んでいた。しかし現在、その機会は大きく減少している。

保育園は小さな社会である。異なる価値観や性格をもつ子どもたちが共に過ごすなかで、時には衝突し、時には折り合いをつけながら、人と関わる力を身につけていく。不登校支援の本質は、学校への復帰ではない。その子どもが社会とどのようにつながり、自分らしく生きていくかにある。保育園やフリースクールは、そのために機能し得る大切な社会のひとつである。本園に関わった子どもたちのなかには、再び学校に通い始めたり、進学や就職を果たしたりした例もある。一方で、継続的な支援が難しいケースも存在する。

保護者が自責の念にとらわれる場面も多いが、子育ては家庭だけで完結するものではない。地域社会が共に支える視点が不可欠である。今後も地域の一員として、子どもと保護者に寄り添いながら、共に成長していく存在でありたいと願っている。

写真3　教育支援センターに通う子どもたちからの色紙

PROFILE

中島 章裕（なかじま・あきひろ）

社会福祉法人明照保育園にて、幼保連携型認定こども園、放課後児童クラブ、フリースクール、児童発達支援事業、放課後等デイサービスを運営。豊橋保育協会会長を8年間務め上げた後、現在は、愛知県私立保育連盟会長、愛知県社会福祉協議会経営者委員会副委員長を務める。